特別賞

地域畜産振興部門

青森県十和田市
社会福祉法人恩和会
授産施設農工園千里平
（代表：坂本　嘉隆）

農工園千里平の利用者の皆さん

牛がつなぐ福祉と畜産の里

― 牛づくりは人づくり ―

農工園千里平の設立者で元園長でもある坂本嘉隆氏は、昭和 21 年に北海道から現在地に入植し、懸命な努力により水田 8ha を耕作する篤農家となった。氏は、言語障害を持つ長女が県立七戸養護学校高等部を卒業しても働き場のない状況を痛感し、同じ境遇に置かれている親子のため、私財を提供して、妻と 2 人で昭和 58 年に在宅障害者の働き場となる施設建設に着手した。

昭和 62 年 4 月に社会福祉法人として認可を受けて以来、農作業を通じた知的障害者の授産施設として 15 歳以上の利用者を受け入れしており、開設当初の 2 名から始まった当施設も今や 38 名の利用者が近くにある福祉ホームや自宅から通園しており、現在、園長のほか 11 名の職員が知的障害者の生活や農作業等の作業指導に献身的に当たっている。

利用者は、農作業や多岐にわたる園内外での活動を通じて日常生活に必要な知識と技能を身に付け、自立した生活ができるよう社会参加を目指して訓練を行っている。農作業については、黒毛和牛の飼育を中心とする畜産班のほか、水稲班、環境整備をする家庭科班に分かれている。

特に利用者にとって牛の飼育担当になることが憧れであり、利用者は自ら進んで長時間の牛体ブラッシングを行う等、牛の管理に喜びを感じている。このような愛情を持って牛に接することにより、牛が非常に穏やかで人によく馴れている。その牛が販売された時大いに悲しむが、再び新しい牛を与えられて生き生きとしてその牛の管理に夢中になること、共進会でチャンピオン賞を取った時には両手を上げて大きな喜びを表す様など、利用者達がこれらの活動に積極的に参加し、自らの意志で目標に向かって努力している。

利用者のこれらの貴重な経験は、広々とした農場の中での穏やかな農作業、とりわけ、牛の飼育は手間を掛ける程牛が人に懐くという形で利用者に返ってくることなど、知的障害者にとって心地良い環境が与えられていること、さらに、園長を始めとする全員の指導者が障害者の可能性を信じ、障害者の立場に立ち、我慢強く対応していること等により実現するものと推察される。

施設では県内の先進農家にも比肩する優良牛を生産しているが、これは市内の肉用牛飼養篤農家による指導と、職員等のたゆまない熱心な研究心によるものであるのは言うまでもない。しかしながら、さらに加えて見逃せない点としては、利用者の「牛とのスキンシップ」とも取れるほどの毎日の丁寧な飼育管理により、ストレスの軽減からくる順調な発育や肥育が期待され、牛が人間や環境によく馴れて生来持っている資質や能力を十分に発揮しているものと考えられることである。その結果、県内外の和牛共進会及び枝肉共励会においても数々の上位入賞につながっている。

利用者が肉牛の飼育に夢中となり、それにより牛が人に懐くこと、その牛が共進会で入賞するたび牛の管理に喜びを感じ自ら積極的に作業することなど、アニマルセラピー効果のあることが推測される。またこのことが、牛にとっても障害者のスキンシップとも取れるほどの飼育管理は快適なものであり、家畜としての能力を十分発揮させるための効果を生み出しているものと推察する。

授産施設での家畜飼養は中小家畜が一般的であり、肉用牛は稀であるが、当施設での肉用牛飼育は非常に有効であることが実証されており、かつ地域畜産振興にも寄与している。このことは他の多くの授産施設に対し多いに参考になるものと考えられる。

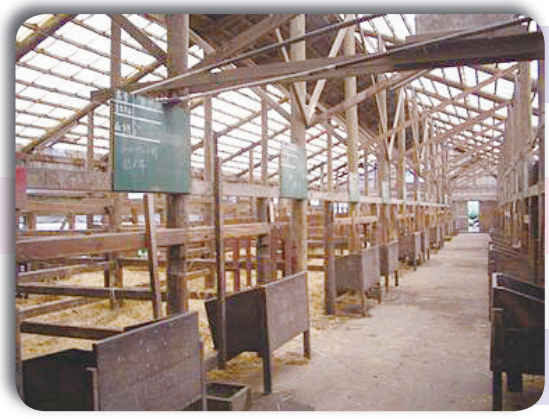
▲中・高校生のボランティア体験の受け入れ
地域の老人クラブや学生との交流も行う

▲農工園千里平の施設
利用者は就業訓練に取り組む

▲稲作部門の地域農家向けの育苗受託・苗販売
自給分の米生産も行っている

▲牛とふれあい世話をする利用者
世話をするのが楽しいと笑みがこぼれる

▲自家遊休地に電気牧柵を設置し放牧を行う
その他、自給粗飼料生産にも取り組む



▲明るく清掃が行き届いている牛舎